茨城県における五領期集落の調査動向と松葉遺跡

土師式土器の変遷について型式的に整理をしたのは周知のように杉原荘介氏がはじめてといえる。杉原式は南関東の資料を中心として,「和泉期」・「鬼高期」・「真間期」・「国分期」の四期の編年区分を昭和21年に発表している(注6)。その編年区分は，他の土師式土器研究者の編年区分とも内容的に類似したもので，その後の土師式土器編年の基本となった。

昭和32年から昭和37年にかけて，埼玉県東松山市五領遺跡の調査が五次にわたって実施され，和泉期以前に「五領期」が存在することが明らかとなった(注7)。このように，埼玉県内をはじめとして各地に和泉期以前の土師式土器の存在が明らかになり，基本的な編年区分が確立したといえる。

茨城県においては，昭和27年に東茨城郡茨城町長岡遺跡が長岡中学校の新設工事に伴って実施され，数基の住居址の調査によって出土した土師式土器に五領期の土器が含まれていたのが，県内における五領式土器の初見ともいえる(注 8)。しかし，内容等の公表がなされず不明な点が多い。

昭和32年３月， 茨城県立竜ケ崎第一高等学校の体育館設置工事に伴って住居址１基の調査が下津谷達男氏によって実施され，その報告がなされている(注9)。

昭和35年12月，那珂湊市富士ノ上遺跡の一部が警察署宿舎の新設工事のため調査され，Ｓ字状口縁を有する台付甕形土器等が出土している(注10)。

昭和42年２月,竜ヶ崎市馴馬町成沢遺跡において住居址１基の調査が竜ヶ崎第二高等学校を中心に実施され(注11),同年８月には,西宮一男氏によって新治郡千代田村市川遺跡の調査が行われた。市川遺跡も住居址１基の調査で，壺・甕・台付甕・坩・高坏・器台等の土器が出土している(注12)。

以上のように，昭和30年代から昭和40年代のはじめは五領期研究の初期的段階であり，集落の調査は住居址１基を単位とした部分的な調査に終っている。

昭和42年から昭和43年にかけて茨城考古学会が中心となり，県内の土師式土器の集成を実施している(注13)。しかし，遺跡からの採集品あるいは耕作などによって出土したものなどを多く集成しているため，五領期の土器にかぎらず伴出関係が不明で，報告者の明確な時期決定もなされていない。内容は資料紹介にとどまっているが，県内の土師式土器を始めて網羅したもので，その価値は高いといえる。

昭和42年４月から６月にかけて，茨城考古学会を中心として，日立市久慈町曲松遺跡の調査が宅地造成に伴って実施され，引き続いて同年11月から昭和43年３月にかけて曲松遺跡に隣接した金井戸遺跡の調査も実施された。両遺跡から五領期の住居址が数基調査され,金井戸遺跡では，方形周溝墓の調査も行われている(注14)。特に古墳時代の集落址研究に大きな期待をよせながら調査内容等については公表されず，遺物等は現在日立市郷土博物館に保管されている。

昭和45年３月から４月には，石岡市所在の常陸国府跡の調査が石岡小学校の改築工事に伴って実施され，歴史時代の遺構に攪乱されていたが，調査区中央部に五領期の住居址が１基検出された(注15)。

昭和40年代後半になると，県南部および水戸市周辺地区において大規模開発に伴う発掘調査が実施され，五領期の集落址の調査も実施された。

昭和47年７月から８月にかけて，茨城県住宅供給公社の土浦市烏山住宅団地造成に伴う烏山遺跡のA・B・C地点の発掘調査が国士館大学考古学研究室を中心として実施され，約250基に及ぶ住居址が調査されている。A地点においては，五領期の住居址５基が調査され，そのうち７期が玉造の工房址らしく，勾玉・管玉と未製品が多数出土している。五領期の玉造集団として貴重な内容を含んでいるが，中間報告が公表されただけで詳細については未発表である(注16)。

烏山団地の造成工事に伴う発掘調査は，その後も実施され，昭和49年３月に第二次調査，同年７月から12月にかけて第三次調査が茨城県教育委員会によって実施されている。

昭和48年４月から５月には，東茨城郡大洗町長峯遺跡の調査が県立大洗高校の新設工事に伴って実施され，弥生時代後期の住居址17基と古墳時代以降の住居址18基が調査されている。そのうち五領期に編年される住居址は２基である(注17)。

同年４月から９月には，水戸市向井原遺跡が宅地造成工事に伴って調査された。向井原遺跡は桜川の支流の沖積地に西南する標高45～47mほどの台地で，水田との比高は４～５mほどである。集落は台地西縁辺部に検出され，47基の住居址が調査され，五領期の住居址は33基で，ほかは縄文中期が１基，弥生中期および後期のものが８基で，不明のもの２基である。集落の東側には南北方向に走る幅２～３mほどの大溝が検出され，五領期の集落との関係が示唆される。また，本集落の最大の住居址の規模は９mほどの方形をなし，最小のものは３mほどの方形を呈している。住居址群のほか４基の方形同溝墓と１基の円形周溝墓が調査されている。しかし，報告書が未刊であるためその内容は公表されていない。

昭和49年３月～４月には勝田市三反田小学校遺跡（後三反田遺跡）の第一次調査が行われ，３基の五領期の住居址が調査された(注18)。三反田遺跡の遺物等については，以前に井上義安氏らの手によって紹介がなされているが(注19),それらは発掘調査による資料ではない。また，昭和52年および昭和53年に第二・三次の発掘調査が実施されている。

昭和49年３月には茨城県教育委員会が中心となって土浦市烏山遺跡の第二次調査がD・E地点を中心として実施された。両地区から計75基の住居址が確認され，五領期に編年されるものはE地区に４基だけである(注20)。その報告については不明な点が指摘できる(注21)。

同じく７月から12月にかけては烏山遺跡群の第三次調査が茨城県教育委員会を中心として実施された。調査された遺構は住居址36基・土壙10基・溝状遺構１基・古墳９基・貝塚２地点である。

古墳時代前期の住居址として24基があげられているが，五領期および和泉期を前期とし，その各々の時期については記載されていない(注22)。

昭和50年から昭和53年にかけて東茨城郡大洗町髭釜遺跡の発掘調査が実施された。髭釜遺跡は国鉄鹿島線大洗駅建設に伴う区画整理事業と，鹿島線建設に伴う路線内の調査である。全体の内容については公表されていないが，中間報告等でその内容の一部を把握することができる(注23)。当遺跡においては，弥生時代後期から平安時代に及ぶ住居址群が検出された複合遺跡で，五領期の住居址のほかに方形周溝墓の調査も実施されている(注24)。

昭和51年７月から８月には那珂郡東海村小沢野遺跡の調査が茂木雅博氏を中心に行われ，住居址が47基ほど調査された。そのうち，五領期に編年されるものは９～10基ほどで，複合が著しく土器を伴うものは２基であり，新旧二期の分類がなされている(注25)。

昭和40年代後半から昭和53年にかけては五領期の集落を含む古墳時代の集落跡の調査例が多く茨城県における五領期集落研究の重要な時期といえる。

昭和52年７月から８月にかけて勝田市三反田遺跡の第二次調査が，継続調査として実施された。内容は五領期の住居址２基の調査であるが，多くの遺物が出土している。特筆すべきことは，南関東系の弥生式土器の伴出がみられ，今後の資料が待たれる(注26)。三反田遺跡の第三次調査は，昭和53年３月に実施され，五領期の住居址２基が調査されている(注27)。

昭和52年７月から昭和53年３月には，竜ヶ崎ニュータウン建設に伴う松葉遺跡と外八代遺跡が調査され，松葉遺跡については前章で記述した。外八代遺跡についてはほとんど遺構内の調査は実施されていないが，五領期に編年される土器が検出されている(注28)。

昭和52年10月から昭和53年３月には，鹿島郡鹿島町木滝台遺跡が調査され，稲荷台遺跡から五領期の住居址25基と大溝が確認されている。特に大溝からは多くの五領期の土器が出土し，単なる排水溝等の施設ではなく，祭祀の場に利用されたものであろうとしている(注29)。

昭和53年２月から３月は，那珂郡東海村部原遺跡の調査が実施され，五領期の住居址が検出されている(注30)。

昭和53年度内の県内における五領期集落の調査については明確に把握していないが，当教育財団の実施した調査において，竜ヶ崎市沖餅遺跡・新治郡千代田村下志筑遺跡・同村西原遺跡・同郡桜村下広岡遺跡等から住居址の検出が知られている。

このように昭和27年から昭和54年初めまでの茨城県内における五領期の集落調査の動向を記述したが，大略すると部分的な調査例から大形開発に伴う集落跡全体の調査へと移向し，その調査例も増加した。集落跡全体の調査例の増加の時期に，遺跡を分割して年度ごとに部分的な調査を実施する動きもあり，今後の調査研究に期待されるものである。

五領期の集落址の内容を平面的に分類すると，住居址の分布密度の高い集落跡とそうでない集落跡に分類される。密度の高いものとしては向井原遺跡・烏山遺跡（三次）・稲荷台遺跡と部分的ではあるが三反田遺跡等があげられる。これらの遺跡は三反田遺跡のように部分的な調査例を除けば集落跡全域の調査例であるといえる。稲荷台遺跡についてみれば，削平された部分もあるが，その分布密度は非常に高いものといえる。また，向井原遺跡についてみれば，五領期集落跡調査の好例ということができる。しかし，平面的な分類にしても各住居址の時期を明確に把握しなければ，その集落跡の構成単位の分類にも大きな誤りを犯すことになる。

向井原遺跡調査の私見によれば，五領期の住居址は少なくとも二期に分類することが可能で，五領期における住居址間の複合関係はみられない。しかし，方形周溝墓の一部が住居址を切りこんでいる事実から，方形周溝墓にも時期差が認められ，二期のうちのいずれかよりも後出とすることができる。後日，向井原遺跡の報告も公表されることと考えられるので，その内容の分析については報告書刊行時に発表したいと考えている。

向井原遺跡の東側には南北に走る大溝がみられ，集落跡を区画していると思われる。このような大溝は，稲荷台遺跡にもみられ，集落を区画する溝であろう。大溝等の遺構については今後の資料の増加を待ちたい。

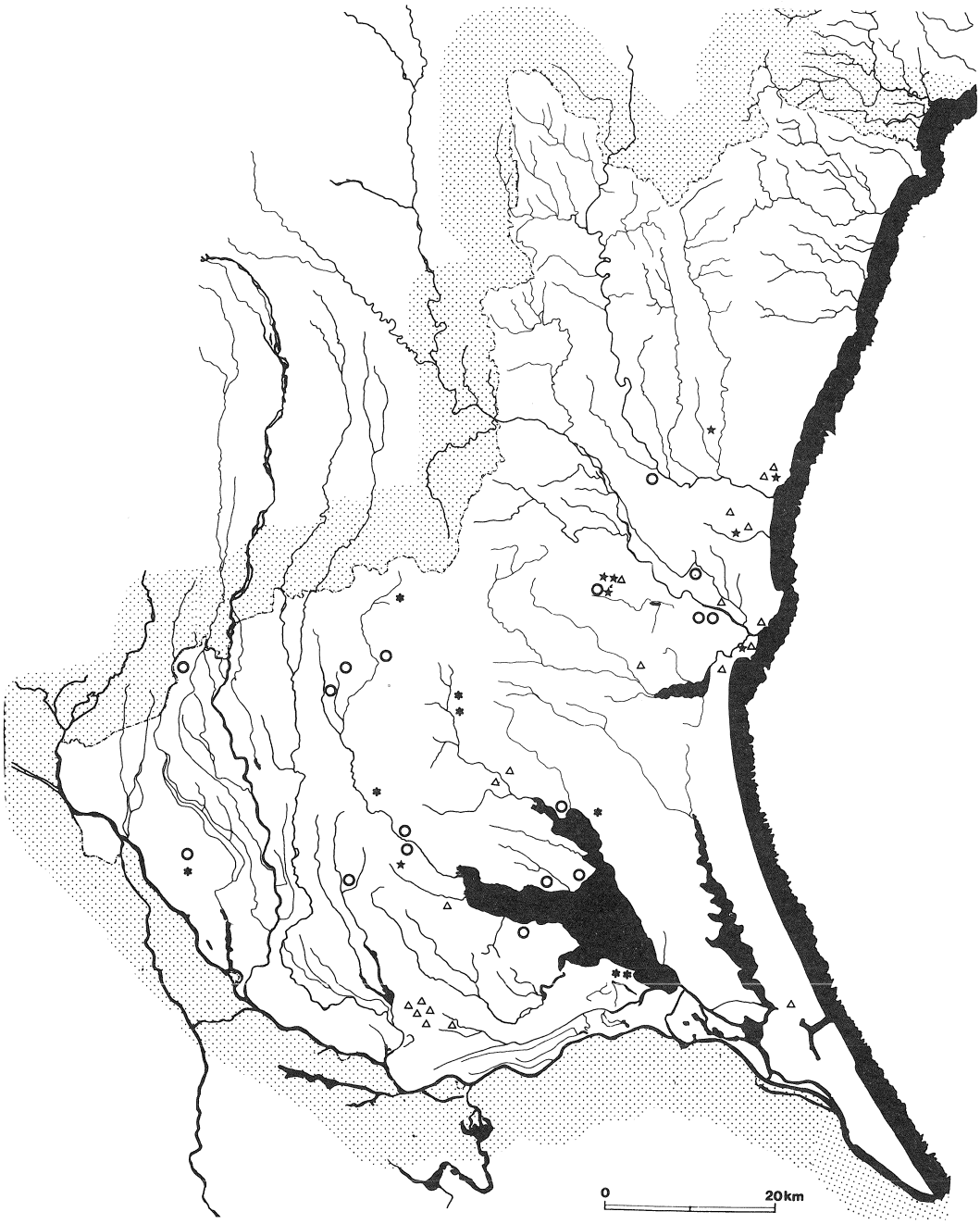
茂木雅博氏は，小沢野遺跡の調査報告書の中で，五領期に二期の集落跡の存在を示し，その時期を五領Ⅱ式・五領Ⅲ式としている。

松葉遺跡出土の土器群を，他の遺跡の土器群と比較した場合に，小沢野遺跡における五領Ⅱ式と比定された土器群や稲荷台遺跡の一部の土器群，三反田遺跡の土器群等に類似性が認められ，五領Ⅱ式の土器群と時期決定することができる。しかし，稲荷台遺跡・三反田遺跡は松葉遺跡から出土していない土器群を含んでいる。稲荷台遺跡にはかなり多くの器種がみられ，高坏形土器は大形のものが多くみられる。また，壺形土器においても南関東系弥生式土器の伴出がみられる。三反田遺跡の土器群は，松葉遺跡出土の土器群と類似したもの以外に南関東系弥生式土器群の伴出例が多くみられ，第4号住居址出土の壺形土器は南関東弥生式土器の系譜を示したもので，搬入された可能性が強い。また，S字状口縁を有する台付甕形土器の出土もみられる。

以上のような土器群は松葉遺跡においてはほとんどみられず，有段口縁の端部に押圧痕のある壺形土器の破片がみられるだけである。

茨城県における五領期の集落および土器群についての研究は，前述の動向にもかかわらずほとんどなされておらず，川崎純徳氏によって古墳文化成立の問題について論ぜられたものがある(注31)。

川崎氏によれば，茨城県における弥生文化の終末から古墳前期の文化への変遷は，少数の五領



△発掘調査集落址　　★方形周溝墓

○土器出土遺跡　　＊発生期古墳

第 67 図　茨城県内五領期遺跡地図

期の侵入者が在来の弥生人の収奪上にまず霞ケ浦周辺の開拓を実施し，全県下に波及していったとしている。それは，弥生時代後期において空白地帯に近い状態であった霞ケ浦周辺および県南地方に，五領期の侵入者が湿地造成の農業土木技術をもって侵入した時期と，さらに，既成の労働力を再編成することによって広大な沖積地の開拓を行う時期に二分され，この結果が県南地方を中心に五領期の遺跡が多い背景として理解されるとしている。大塚初重氏はこの二時期の土器群を，「前段階の弥生式土器終末の特徴をなお残しつつも，一部に先進文化の波及をみせる新式の土器群」と「西方畿内・東海地方からの文化の波及によって初めて出現する。いわば畿内的特色をもつ土器群」と二分している。つまり，前者が五領Ⅰ式土器，後者が五領Ⅱ式土器である(注32)。

両氏の土器細分には若干の差異も認められるが，「北関東最終末の弥生式土器である十王台式土器から最古の土師式土器への変化は，極めて激しい動きとしてとらえられる。」と大塚氏は述べ，川崎氏と同様な見解を示している。

五領Ⅰ式土器を出土する明確な集落跡として注出される遺跡は不明な点が多いが、松葉遺跡のように五領Ⅱ期の集落跡は広大な沖積地の開拓を行う時期の集落跡であるといえる。竜ケ崎市内を概略的にみた場合にも，松葉遺跡と同時期の遺跡数は多く，規模としてはそれほど大形の遺跡ではないが，農耕地の開拓者集団として分散した単位集団の集落跡であったといえる。

この時期は，一河川の流域や湖沼周辺の湿原地帯の小さな分布圏を有するばかりではなく，広い分布圏を示し，各地において政治的な性格を備えた支配者階級の出現へと発達していく時期でもある。そして，茨城県における古式古墳と呼ばれる発生期の支配者階級の墳墓を出現させ，さらに，大和朝廷の権力等の浸透によって大形の古墳築造期へと展開していく。

茂木雅博氏は小沢野遺跡の調査結果の中で小沢野Ⅰ期（五領期）の集落跡は，五領Ⅱ期を５～６棟を中心とした２単位集団の構成とし，計算上は約50人ほどの人口を有した集落であり，五領Ⅲ期は人口の減少がみられ，和泉期にはさらに減少する傾向があるとしている。

五領Ⅱ期においては，人口の増加とも関連して血縁的な単位集団が独立分散して耕作地の開拓を実施し，その時期の一集落が松葉遺跡等にみられるような住居址の構成を有したもので，広い分布圏を示しながら，各地に政治的な支配者階級の出現へと発展していくものであろう。

五領期には古墳の発生の問題や方形周溝墓の存在等多くの問題を有し，簡単にはいいつくせないが，発生期の古墳と方形周溝墓との併行時期に関して解明されなければならない問題点もそのひとつとしてあげられる。

これらの問題点については今後の研究課題としたが，松葉遺跡の時期は前述のように分布圏の拡大の時期にあたり，その居住期間は一世代あるいは二世代を越えない期間で，沖積地等の開拓に従事した集落として把握することができる。

引用文献

注1　霧ケ丘遺跡調査団　『霧ケ丘』　昭和48年10月

注2　千代肇他　『函館空港第4地点　中野A遺跡』　函館市教育委員会　昭和52年3月

注3　石岡憲雄氏の御教示による。

注4　鈴木道之助他　『京葉Ⅱ　千葉市東寺山戸張作遺跡』　千葉県文化財センター　昭和52年3月

注5　能島清光　『花野井遺跡調査報告書』　美野里町教育委員会　昭和52年3月

注6　杉原荘介　『原始学序論』　昭和21年

注7　大塚初重　「埼玉県五領遺跡の調査について」『日本考古学協会第21回総会研究発表要旨』日本考古学協会　昭和35年

杉原荘介・大塚初重　「埼玉県五領遺跡第三次調査について」『日本考古学協会第27回総会研究発表要旨』日本考古学協会　昭和36年

大塚初重　「埼玉県東松山市柏崎五領遺跡の土器」『弥生式土器集成』昭和46年12月

杉原荘介・大塚初重・和島誠一・金井塚良一　「埼玉県五領遺跡第四次調査について」『日本考古学協会昭和37年度大会研究発表要旨』日本考古学協会　昭和37年

金井塚良一　「五領遺跡B区・発掘調査中間報告」『台地研究』1・台地研究会　昭和38年

大塚初重　「埼玉県東松山市五領遺跡」『日本考古学年報』10　日本考古学協会　昭和38年

大塚初重　「埼玉県東松山市五領遺跡」『日本考古学年報』12　日本考古学協会　昭和39年

大塚初重　「埼玉県東松山市五領遺跡」『日本考古学年報』13　日本考古学協会　昭和40年

大塚初重　「埼玉県東松山市五領遺跡」『日本考古学年報』15　日本考古学協会　昭和42年

注8　伊東重敏　『常陸国東茨城郡長岡遺跡略報』　常北考古学研究所学報9輯　昭和27年7月

大森信英　「古墳文化と那珂国造」『水戸市史』上　水戸市　昭和38年10月

井上義安・大内幹男　「東茨城郡茨城町長岡中学校校庭の土師器」『茨城県の土師器集成』1　茨城考古学会　昭和42年3月

神永義彦　「東茨城郡茨城町長岡の土師器」『茨城県の土師器集成』1　茨城考古学会　昭和42年3月

川崎純徳　「長岡遺跡出土の土器」『土師式土器集成』Ⅰ　昭和46年12月

注9　下津谷達男　「茨城県竜ケ崎市県立第一高等学校内遺跡」『上代文化』37　国学院大学考古学研究会　昭和42年10月

西宮一男　「竜ケ崎第一高等学校内遺跡」『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』　茨城県　昭和

49年２月

注10 井上　義　「那珂湊市富士ノ上警察署敷地の土師器」『茨城県の土師器集成』１　茨城考古学会　昭和42年３月

上川名昭　「常陸富士ノ上遺跡」『日本大学第三高校研究年報』12　昭和43年

井上義安　「富士ノ上遺跡出土の土器」『土師式土器集成』Ⅰ　昭和46年12月

注11 岡田　猛　『茨城県竜ケ崎市馴馬町成沢遺跡調査報告』　昭和43年

西宮一男　「成沢遺跡」『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』　茨城県　昭和49年２月

注12 西宮一男　「新治郡千代田村市川の土師器」『茨城県の土師器集成』２　茨城考古学会　昭和43年３月

西宮一男　『市川遺跡・根崎古墳・清水並木経塚』　千代田村埋蔵文化財調査報告Ⅰ　千代田村教育委員会　昭和44年２月

西宮一男・滝田源三郎・鈴木幹男　「茨城県新治郡千代田村の遺跡調査」『茨城考古学』２　茨城考古学会　昭和44年３月

西宮一男　「市川遺跡出土の土器」『土師式土器集成』Ⅰ　昭和46年２月

西宮一男　『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』　茨城県　昭和49年２月

注13 茨城考古学会　『茨城県の土師器集成』１・２　昭和42年・昭和43年

注14 住谷光男　「日立市曲松遺跡調査概報」『史学部報』17　日立第一高等学校史学部　昭和43年

佐藤次男　「曲松集落遺跡」『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』　茨城県　昭和49年２月

佐藤次男　「金井戸集落遺跡」『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』　茨城県　昭和49年２月

岡村和子　「d千葉県　g茨城県（東関東地方）」『原始墓制研究』５－方形周溝墓研究その５「研究史編」東日本一原始墓制研究会　昭和52年６月によれば，方形周溝墓の検出された遺跡は金井戸遺跡ではなく，佐藤政則氏の御教示として曲松遺跡から検出されたとしている。しかし，方形周溝墓の検出されたのは金井戸遺跡の台地の東縁辺部よりである。

注15 豊崎　卓　『常陸国府址発掘調査報告書』　石岡市教育委員会　昭和48年12月

注16 大川清・戸田有二　「烏山集落遺跡」『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』　茨城県　昭和49年２月

大川、清　『茨城県土浦市烏山遺跡発掘調査中間報告』　国士館大学考古学研究室　昭和49年

注17 井上義安・藤井裕紀枝他　『茨城県大洗町長峯遺跡』大洗町文化財調査報告書４集 大洗町教育委員会　昭和48年12月

注18 川崎純徳・鴨志田篤二　『三反田遺跡』勝田市教育委員会　昭和52年３月

川崎純徳　「三反田遺跡」　『日本古考古年報』27　日本考古学協会　昭和51年５月

注19 井上義安　「勝田市三反田小学校敷地の土師器」『茨城県の土師器集成』１　茨城考古学会　昭和42年３月

井上義安　「三反田遺跡出土の土器」『土師式土器集成』Ⅰ　昭和46年２月

注20　西宮一男　「烏山遺跡」『日本考古学年報」25　日本考古学協会　昭和50年３月

西宮一男・大森信英・高根信和・小室勉他　『土浦市烏山遺跡群ー土浦市烏山住宅団地造成用地内埋蔵文化財２・３次調査報告書ー』　茨城県住宅供給公社　昭和50年３月

注21　川崎純徳　「土浦市烏山遺跡の検討」『常総台地』７　昭和51年５月

注22　注20同

注23　ひいがま遺跡発掘調査団　『ひいがま』Ⅰ　昭和50年８月

ひいがま遺跡発掘調査団　『ひいがま」Ⅱ　昭和50年11月

ひいがま遺跡発掘調査団　『ひいがま』Ⅲ　昭和51年３月

ひいがま遺跡発掘調査団　『ひいがま』Ⅳ　昭和52年４月

注24　宮田　毅　「髭釜遺跡」『日本考古学年報』28　日本考古学協会　昭和52年４月

菊田　徹　「髭釜遺跡出土土器について」『ひいがま』Ⅱ　ひいがま遺跡発掘調査団　昭和50年11月

注25　茂木雅博　『茨城県東海村小沢野遺跡調査概報』　小沢野遺跡調査団　昭和52年３月

茂木雅博　「小沢野遺跡」『日本考古学年報』29　日本考古学協会　昭和53年３月

茂木雅博他　『小沢野』　東海村教育委員会　昭和53年４月

注26　川崎純徳・鴨志田篤二・住谷光男　『茨城県勝田市三反田遺跡群調査報告書』　勝田市教育委員会　昭和53年３月

注27　鴨志田篤二・住谷光男・川崎純徳・山崎悠紀子　「勝田市三反田遺跡」『第２回茨城県考古学研究発表会要旨』　茨城県考古学協会　昭和53年10月

注28　財団法人茨城県教育財団　『竜ケ崎ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅰ一昭和52年度外八代遺跡・松葉遺跡一』　昭和43年３月

注29　鹿島町木滝台遺跡調査会・日本文化財研究所　『木滝台遺跡群（稲荷台遺跡・桜山古墳）埋蔵文化財調査概報』　昭和53年３月

田中　崇　「鹿島町木滝台遺跡」『第２回茨城県考古学研究発表会要旨』　茨城県考古学協会　昭和53年10月

注30　茂木雅博　『茨城県東海村部原遺跡調査報告書』　東海村教育委員会　昭和53年３月

注31　川崎純徳　「古墳以前一常総地方における古墳成立基盤について考える一」『常総台地』６　昭和47年12月

注32　大塚初重　「集落と祭祀遺跡・生産関係遺跡」『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』　昭和49年２月

大塚初重　「弥生式土器から土師式土器へ」『古代の地方史５　坂東編』　昭和52年10月